

2012年度 立教 SFR 国際会議助成成果報告書 (A, ㊦, C)

1. 会議概要

| | | | | |
|------------------|--------------------------------|--|--------------------------------------|--------------|
| 会 議 名 | 和文 | 日本学の現在と未来 | | |
| | 欧文 | The Present and Future of Japanese Studies | | |
| 主 催 | 立教大学日本学研究所 | | | |
| 共 催 | 立教大学日本文学会、立教大学史学会 | | | |
| 後 援 | | | | |
| 開催責任者 | 所属 | 文学部 | | |
| | 氏名 | 深津行徳 | | 印 |
| 運営事務局 | 事務担当者 | 文学部 | | |
| | 氏名 | 蔵持重裕 | | |
| 開催期間 | 2012年 11月 3日 から 2012年 11月 4日まで | | | |
| 開催場所 | 太刀川記念館・多目的ホール | | | |
| 参加者数※1 | 学内 | 9名 | | |
| | 学外 国内から招聘 | 13名 | | |
| | 海外から招聘 | 7名 | 6カ国 | 合計 29名 7カ国 |
| 公開講演会等 参加者数※2 | ① | 2012年 11月 3日 | 40名 | 3カ国 |
| | ② | 2012年 11月 4日 | 58名 | 4カ国 |
| 開催日程 | | 午前 | 午後 | 夜 |
| | 第1日 | 基調講演1 基調講演2 | 第一セッション・シンポジウム「アジアへの視点と言説」 | レセプション |
| | 月 日 | | | |
| | 第2日 | 第二セッション・シンポジウム「宗教文化と儀礼－図像と言説」 | 第三セッション・シンポジウム「〈物語〉2012－語り・絵・『源氏物語』」 | 総合討論 |
| 月 日 | | | | |
| 第3日 | | | | |
| 月 日 | | | | |
| 開催経費総額 | 予算額 | 2,670,443 円 | | 執行額 2,346 千円 |

※ 1 参加者とは、会議において講演、パネラー、コメンテーター等の活動を伴う者をいう。

※ 2 一般に公開された講演会等に聴講のために参加した者。講演者、パネラー等は除く。所要経費が60万円以上の会議で参加者がのべ100人を超える場合は、参加者名簿を添付すること。

2. 開催趣旨概要

立教大学日本学研究所設立10周年を記念して、今までの研究活動を集約するとともに、大震災を契機とするおおきな転換の時代を迎えた情勢のもとであらたに日本学の現状を見据え、未来の日本学のあるべき動向を模索し、広がりと深さのある研究体制を確立するために国際会議を企画した。第一セッションでは、近年研究が活発になっているアジアの意義を、主に史学系を中心に多方面から解析する。第二セッションでは思想系から現在世界的に複雑で困難な問題を抱えている宗教の課題をとりあげ、第三セッションでは、文学系から古典学のあらたな再生、再創造をめぐる問題群を照射する。琉球、朝鮮、中国、ベトナムなどとの関わりに照明を当てて東アジアを焦点化し、前近代と近代の断絶と連続をふまえた架橋を課題として、絵画、イメージ、造形、儀礼、口頭伝承など多方面からの追究を行う。

3. 国際会議の成果概要・今後の展望等

立教大学日本学研究所主催国際シンポジウム「日本学の現在と未来」は、のべ200名ほどの参加者を得て、盛況であった。

第1セッションでは、西欧の人々に日本の基底的形象を植え付けた16世紀の宣教師等の報告、那覇を港湾都市として展開する中で王国の統一を進めた琉球王国、中国からの帰国者などから日本の情報を得こソウル周辺の韓国北学派について報告がなされた。これらの報告は、地域的には朝鮮、中国、西欧、南米と広域な目配りの中で論じられ、東アジアに偏りがちな「前近代の日本の国際関係」を広げたことに新鮮な成果があった。いっぽうで、各地域の人々と国家が「日本」のイメージを創るうえで、自分たちの関心にしがたって、利便的に理解しようとする傾向は免れない。情報の全量とその伝達の全貌を明らかにしていくことが、引き続き最重要な課題であることを示すものとなった。

第2・3セッションでは、文字テキストを基盤とする文学研究において、絵画テキストもまた文字テキストの外縁のみならず内縁に包含される重要な要素であることが、あらためて問題提起された。文学研究の今後の進むべき方向性が、ここに探りあてられたとあってよい。

また第3セッションでは、『源氏物語』の語りにもみる絵画化の方法、「源氏絵」の変遷についての様式論的な整理、『源氏物語』を引用する上田秋成『雨月物語』の語りの方をめぐって報告があり、『源氏物語』の語りの方について享受史も含めて論じる必要性、絵画化や和歌の問題も含めての総合的な視野が必要であるとの見解で一致した。さらに、文字テキストから析出しうる思想や哲学、あるいは宗教的なパースペクティブに加えて、絵画テキストゆえに有用な美術史学あるいは民俗学・人類学等への架橋が、文字テキストの研究をいかに豊饒なものとするかということが再認識された。

これらの成果の上に、「幻の源氏物語絵巻」と仮称する謎の豪華絵巻を文化史的に位置づけることを目的とした国際会議を、2013年7月に開催することで同意した。次回の国際会議は、日本文化史のミッシングリンクというべき近世初期の古典学の実相に迫る、先鋭かつ有効なアプローチとなろう。

さらに、ベンゾーニ氏からの要請で、ミラノ大学と立教大学日本学研究所との交流、共同研究などの可能性を探ることになった。この点も、本学の国際的研究活動にとって少なくない成果と言えよう。

4. 会議の構成

(1) 学内参加者

| 氏名 | 所属・職名 | 会議における活動 | 内 訳 |
|---|--------|--|---------|
| 深津行徳 | 文学部・教授 | 統括責任者、総合司会副責任者・第二セッション司会 フロアーコメンテーター 第三セッション司会 事務局・第一セッション司会 会計、フロアーコメンテーター 総務、フロアーコメンテーター 事務局、フロアーコメンテーター | 文学部 9名 |
| 小峯和明 | 文学部・教授 | | 名 |
| 加藤睦 | 文学部・教授 | | 名 |
| 小嶋菜温子 | 文学部・教授 | | 名 |
| 蔵持重裕 | 文学部・教授 | | 名 |
| 沖森卓也 | 文学部・教授 | | 名 |
| 藤井淑禎 | 文学部・教授 | | 名 |
| 石川巧 | 文学部・教授 | 事務局、フロアーコメンテーター | 名 |
| 水口幹記 | 文学部・助教 | 事務局、フロアーコメンテーター | その他 () |
| | | | 計 9名 |
| 変更内容 (氏名、不参加/追加の別) 小野沢あかね文学部教授、在外研究中で予定がつかずに不参加 | | | |

(2) 学外参加者 (国内、国外)

| 氏名 | 国名・所属・職名 | 会議における活動 | 内 訳 |
|--|-----------------------|------------|-----------|
| ジャン・ノエル・ロベール | フランス・コレージュ・ド・フランス・教授 | 基調講演 | 国名 名 |
| マリア・ベンゾーニ | イタリア・ミラノ大学・准教授 | パネリスト | 日本 13名 |
| 寺田澄江 | フランス・INALCO・教授 | コメンテーター | 英国 1名 |
| 阿部龍一 | アメリカ・ハーバード大学・教授 | パネリスト | 米国 1名 |
| ルチア・ドルチェ | イギリス・ロンドン大学・教授 | コメンテーター | 韓国 1名 |
| 佐藤公美 | 甲南大学・准教授 | コメンテーター/通訳 | 中国 1名 |
| 李銘敬 | 中国・人民大学・教授 | コメンテーター | フランス 2名 |
| 佐野みどり | 学習院大学・教授 | パネリスト | イタリア 1名 |
| 土方洋一 | 青山学院大学・教授 | パネリスト | |
| 長島弘明 | 東京大学大学院・教授 | パネリスト | 計 7カ国 20名 |
| 陣野英則 | 早稲田大学・教授 | コメンテーター | |
| 高橋 亨 | 名古屋大学・名誉教授 | コメンテーター | |
| 伊藤 聡 | 茨城大学・教授 | パネリスト | |
| 上島 亨 | 京都府立大学・教授 | パネリスト | |
| 増尾伸一郎 | 東京成徳大学・教授 | コメンテーター | |
| 金炫栄 | 韓国・国史編纂所・教授 | パネリスト | |
| 巖錫仁 | 八洲学園大学・准教授 | コメンテーター | |
| 荒野泰典 | 立教大学名誉教授 | 基調講演 | |
| 関 周一 | 立教大学・兼任講師 | コメンテーター | |
| 上里隆史 | 早稲田大学大学・琉球・沖縄研究所招聘研究員 | パネリスト | |
| 変更内容 (氏名、不参加/追加の別) 佐藤公美甲南大学・准教授、イタリア・ミラノ大学・大学院から所属変更 | | | |